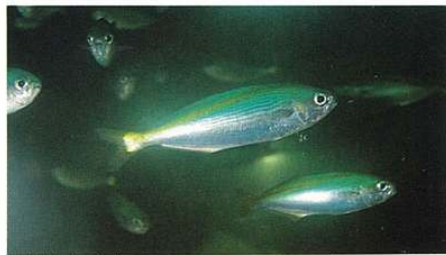
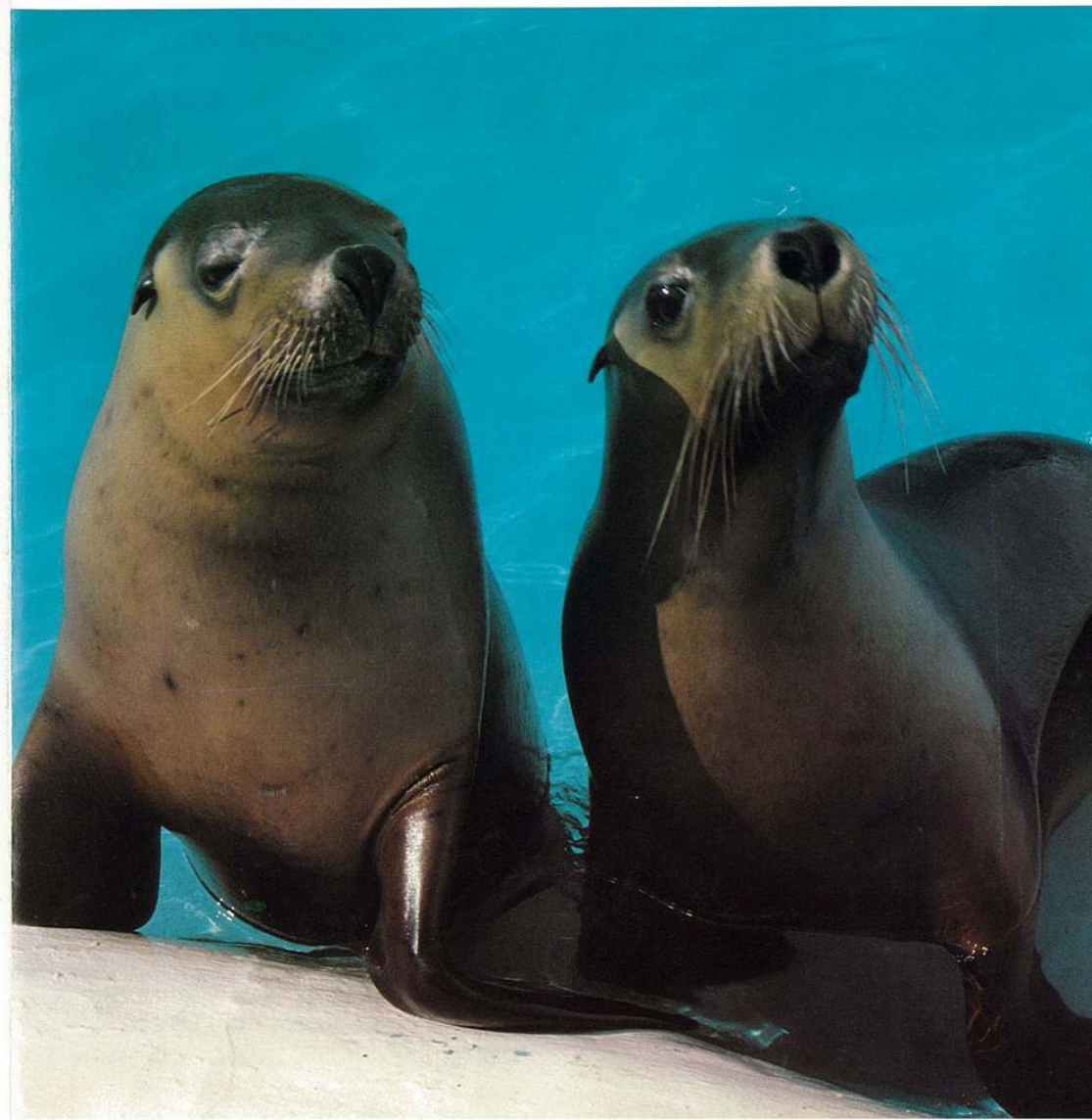
シーワールドのアニマル達

●イワトビペンギン

当館では、イワトビペンギンとフンボルトペンギンの２種類のペンギンを飼育しています。今回紹介するイワトビペンギンは、赤い眼と黄色い飾り羽を頭につけたおしゃれなペンギンで、南極大陸の周囲の亜南極圏一帯に生息する小型のペンギンの一種です。当館のイワトビペンギンは３羽おり、名前を「ロック」「カロン」「テテ」といい、昭和54年12月に初めて当館にやって来ました。シーワールドに着いた時、おなかが空いていたのか、すぐにアジやシシャモなどの小魚を食べ始め、係員を安心させました。その後すくすくと育ち、今では、１日に１羽が400ｇほどの小魚を食べています。イワトビペンギンは、名前の通りジャンプ力がすぐれ、ステージの上をとびまわったり、岩の上にとび上ったりすることも良く見られます。しかし、その反面ほとんど動かずに、じっと立っていることも多く、ぬいぐるみのペンギンとまちがわれることもあるほどです。性格が温厚で、係員が体に触れたり、抱き上げることも簡単にでき、係員のあとについて階段を昇ったりして、園内散歩をする時などには、子供達がすぐに見つけてやって来ては、ペンギンと仲良しになります。そして直接ペンギンの体に触れる子供もおり、さすがのペンギン達も次第に逃げごしとなるほどです。シーワールドに来て早くも３年たちましたが、最近では巣作りも始まり、繁殖も期待できそうです。気の早い係員は、もう二世誕生を夢見て、毎日ペンギン達の世話にはげんでいます。　（吉野）

●タカベ

タカベは南日本の太平洋沿岸に分布している体長25cmになる魚で、青い体に、目から尾びれにかけて、黄色の美しい帯が１本通っているのが特徴です。８月のはじめ、そのタカベが近くの港に大群でやってきたのです。こんなに容易にタカベを採集する絶好のチャンスは、めったにありません。すぐにでも採集したい気持はやまやまでしたが、日中は魚の動きも活発なため、夕暮を待って採集することとしました。夕方港へ行ってみると、港の中はタカベの大群で海が黒くなっていました。ダイバー３人が慎重に水の中に入り、まき網をゆっくりひきながら群を囲んでゆくと、網の中を右へ左へ泳ぎまわるタカベがキラキラと光って見えてきます。どうやらかなりの数のタカベが入っているようです。網の中のタカベをビニール袋で傷つけないように海水といっしょにすくい取り、トラックの荷台に用意した輸送用タンクへと運びます。ところが網の中の魚を半分も運ばないうちにタンクはタカベでいっぱいになってしまいましたので、残りのタカベはもとの海にもどしてやり、急いで帰ることにしました。結局、この日は体長８cmほどのタカベを1500尾も採集することができました。こんなに多くのタカベを短時間に採集できたのは、シーワールドでは数年ぶりのことです。その後、傷の手当や餌付けなど、いろいろな苦労がありましたが、今では円柱水槽で群をなして泳ぐタカベ達の元気な美しい姿を皆さんに見ていただくことができるようになりました。　（桐畑）

▲イワトビペンギン *Eudyptes crestatus*

▲タカベ *Labracoglossa argentiventris*

さかまた No.20　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464−18
☎ 04709（2）2121

発行日　昭和57年12月

さかまた

鴨川シーワールド　NO. 20

南極の魚類収集記

昭和56年11月25日、東京晴海埠頭から第23次南極地域観測隊をのせた砕氷かん「ふじ」が昭和基地をめざして出発しました。この時、観測隊のオブザーバーとして、南極生物の観察や国立極地研究所から委託された水生生物の収集を行なうため同行しました。そして、我が国で初めて、南極からショウワギス、ハゲギス、ボウズハゲギスなどの魚類をはじめ、ウニやヒトデなどを「ふじ」の冷蔵庫で飼育しながら今年4月20日に無事帰国しました。その時運んだ南極の生物は、現在もシーワールドの寒冷地動物飼育室で飼育が続けられています。今回は、これら南極生物の収集について、昭和基地での生活をまじえて紹介してみることとしました。

▲定着氷に仮泊した「ふじ」

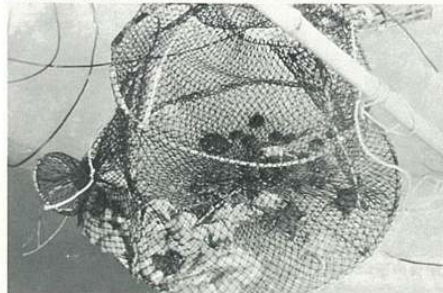
昭和57年1月20日朝6時起床、気温マイナス1度、海水温マイナス2度、昭和基地の西北西約37kmの定着氷に仮泊した「ふじ」から、いよいよ昭和基地に行くことになりました。今年の氷状の悪さは、ビセット（氷にとじこめられ身動きできない状態）までにはいたりませんでしたが、密氷群のハンモックアイス（氷丘氷）地帯に行く手をさえぎられ、チャージング（船を前後に移動し氷を体当りで割って進む砕氷航行）が1500回と南極地域観測史上3番目という苦闘ぶりで、予定より10日遅れていました。そこで、昭和基地での活動はこの10日分を取り戻すスケジュールでスタートしました。

▲空から見た昭和基地

ここで昭和基地について、簡単に紹介しておきましょう。昭和基地は、東京から直線距離にして約14,000km、南極大陸クイーン・モード・ランド、宗谷海岸、東オングル島（南緯69°00′、東経39°35′）の標高29.18mに位置し、居住棟、観測研究棟、ロケット関係棟、送信棟、発電棟、倉庫など約3,491㎡の施設を持ち、毎年観測隊が越冬し、観測、調査研究に従事しています。真夏の基地は雪が溶け、赤茶色のむき出した岩の上にブルーとオレンジ色の建物が並び、風で舞い上がったウンモが、キラキラと輝いています。短い夏にすべての準備と越冬のための引継ぎをしなければならないため、隊員はこの1ヶ月間、ほとんど寝るひまもないほど働かなければなりません。数年前から計画し、準備し、練習してきた通りに、すべて完璧に仕上げなければならないのです。

▲昭和基地　北の浦での採集

魚を釣るための準備は、持込んだ装備と基地の器材をソリに積み、岸から600mの所の氷に穴をあけます。いけすを入れるため、アイスオーガーという直径10cmのドリルで、厚さ1.5mの氷に40ほど穴をつくり、ノコギリで切りとると1トンの氷が浮き上がって来ます。これをいくつかに切り出して氷上に引き揚げる作業を続け、半日がかりでやっと1つ穴をあけることができました。

いよいよ釣りの始まりです。アジ釣り用のサビキという仕掛けを30mの海底まで入れると、すぐに手ごたえがあり、ショウワギス1匹、ハゲギス1匹を釣りあげることができました。ショウワギスは、海底にナワバリを作って生活しているらしく、同じ所で釣るとだんだんと魚が小さくなり、初めに釣れたものが25cm、20匹めごろには15cmぐらいの大きさになってしまいます。どれも3mmぐらいの魚の卵や赤いホヤを食べており、釣り上げられると、食べたものをはき出しながら上がって来て、いけすに入れてもなおはき出しているのです。ハゲギスは、中層を群れている種類らしく、釣れる時は10匹ぐらい釣れてしまうことがあります。2時間ごとに30分づつ12回に分けて、1日のうちいつが一番釣れるのか調べたところ、夕方の4時が一番釣れ47匹、夜10時から朝4時までは1匹から2匹、他は15匹ぐらいでした。

▲いけすの中のヒトデ、ウニ、ヒモムシ

翌朝氷の穴の上に張った薄氷を割りにゆくと、薄氷の中央がもり上がっていました。今まで4cm近い厚さに凍っていたのに、そのあたりの薄氷は2cmもありません。ウエッデルアザラシのしわざです。いけすの中の魚が数えるほどしかいません。調べてみると、いけすが3ヶ所食い破られています。しばらくすると、魚をくわえたウエッデルアザラシが顔を出しました。1mぐらい近くにヌーと顔を出したアザラシの大きさは2m以上あります。氷の上に引き揚げたいけすと人間を見ながら、クチャクチャ魚を食べています。南極では、ペンギンやアザラシに危害を加えてはならないことになっているので、人間を恐れません。追払っても翌日50m離れた別のいけすをまた、食い破られてしまいました。そこで、600m離れた水深8mのところに、いけすを全部移すことにしました。

アザラシが現れてからは、釣れる魚の匹数も減ってきました。餌にイカ、アジ、牛肉、ベニショウガなどを使い、なんとか魚を集めなければなりません。低気圧も接近し、氷がギシギシ音をたて始めています。餌を使った釣ではベニショウガや牛肉の赤い色のものが良く釣れました。イカでは、魚の他にクモヒトデが釣れました。昼を食べに基地に帰るため、餌のイカやアジをビニール袋に入れ、臭いが出ないようにさらに何重にもビニール袋をかぶせ、その上に20kgぐらいの氷をのせて水と細氷をかけ、中のビニール袋が見えないようにしました。しかし、1時間後にもどって見ると、餌を入れた重さ10kgのビニール袋がなくなっていました。オオトウゾクカモメです。羽の大きさが1.5mほどのカモメで、ペンギンのヒナでもさらって行く力持ちです。

▲ショウワギス　*Trematomus bernacchii*

▲ひる寝中のウエッデルアザラシ　*Leptonychotes weddelli*

ハプニングとの出会いの毎日も、3日間に渡って吹き荒れたブリザードが去った2月5日には、魚類30匹その他13種300点の生物を約5時間かけて別々に袋づめし、ヘリコプターで無事「ふじ」に運び込むことができました。積込み準備を始めてから、12時間以上かかる大変な作業でした。すべてを1人で行動した採集は、20年ぶりのことでした。（榊原）

表紙説明

オーストラリアアシカは、生息地のオーストラリア以外では、香港と日本の鴨川シーワールドで飼育展示されているだけの大変めずらしいアシカです。当館のオーストラリアアシカは、昨年8月31日、世界で初めて飼育下での繁殖に成功し、親仔共順調に育っています。そのため、このたび、日本動物園水族館協会より「繁殖賞」をいただきました。（清水）

フンボルトペンギンの人工育雛

今年4月、当館生まれの二世同志であるフンボルトペンギンの「ポッポ」（10才）と「パラ」（4才）がペアーを組み、はじめての三世が6月にふ化しました。ところが、ふ化後15日目に母鳥の「パラ」の腹の下で、ヒナがぐったりとしているのをみつけ、生命が危ぶまれましたので、思い切って人工育雛に切換えてみました。育雛箱に移し暖めてやったところ、少し元気が出てきました。体重は 220 g、手のひらにチョコンと乗ってしまう大きさです。給餌の方法は、初めは注射筒にビニール管をつけ、アジを流動状にしたものを強制給餌しましたが、数日後には、係員の手より半流動状にしたアジを食べるようになりました。そして、係員を見つけると箱の中で後を追いかけたり、お腹がへると、大きな口を開け鳴くようにもなりました。給餌は、

▲ 係員の手から魚のスリ身をもらうヒナペンギン(50日齢)

▲ 仲間のペンギン(左)とお見合い中のヒナペンギン(右)—この日、初めて泳いだー(150日齢)

▲ 親がわりの係員とヒナペンギン(165日齢頃)

鳴いて餌をねだる時に、鳴きやむまで与えました。

9月初めには、体重が2,600 gにまで成長し、係員と一緒に園内を散歩するユーモラスな姿に、お客様の間でもすっかり人気者になりました。しかし、先輩のペンギン達にはまだ顔見せをしたことがなかったため、ペンギンプールへ連れて行き柵ごしにお見合いをさせたところ、そのかいあってか、10月初めにペンギンプールに放した時には、他のペンギンにイジメられることもなく、プールに飛び込んで初めて泳ぎ、心配顔で成行きを見守っていた係員一同をほっとさせました。他のペンギン達に混って一人前の顔をしている姿を見ていると、母親代りの係員は、うれしいやらちょっぴり寂しいやらの複雑な気持になってしまう今日この頃です。

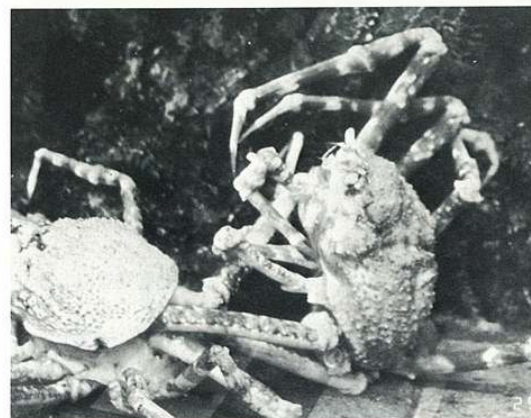
（毛利）

タカアシガニの脱皮

去る7月から9月の間に当館のタカアシガニ４匹（オス１匹、メス３匹）が、次々と脱皮を行ないました。この中で一番大きなメスは、脱皮して甲らの長さが21㎝から25㎝になり、20％ほども大きくなりました。今までに当館では、成長したタカアシガニが脱皮したことはなく、初めてのことです。脱皮はちょうど人が着物でも脱ぐかのようで、まず、甲らと腹部の境が別れて甲らが抜け、次に脚、腹部とゆっくりと抜けて行き、鰓や細い触角まで完全に抜け変わります。脱皮した後の体は柔かく、固くなるまでには１ヶ月近くかかります。タカアシガニなど甲殻類の体は、固い殻におおわれており成長するためには、古い殻から新しい殻へと脱皮し、これをくり返さなければなりません。タカアシガニの大きなオスでは、両方のはさみ脚を広げると３ｍ以上にもなります。このような大きさになるまでには何回くらい脱皮するのか、今後も無事に脱皮ができるように注意をしながら調べてゆきたいと考えています。

（森）

▲ 脱皮開始１時間後、甲らの後から脱皮が始まった。

▲ 脱皮開始２時間20分後、エラまで脱け換わ　のが見える。

◀ 脱皮開始２時間30分後、脱皮完了。まだ殻は柔らかい。

●置水槽のもようがえ

置水槽は、ハマクマノミとサンゴイソギンチャクの共生や、いつもさか立ちをして泳ぎ夜になるとガンガゼのとげの中で眠るヘコアユなど、生物のかわった生態をテーマにした展示を行なっていますが、この水槽をより見やすいものにするため、7月に改装工事を行ないました。まず、ちびっ子でもよく見えるように水槽の高さや説明板の位置を低くするとともに、足元に一段踏み台を設けました。今まで背のびをしていたちびっ子も、これでゆっくりと見学できるようになりました。また、水槽の中もじゃまなパイプが見えないように工夫し、すっきりとしたデザインとしましたので、これからもこの水槽を使って、おもしろい生態を持つ生物を皆さんに紹介してゆきたいと考えております。

（津崎順）

●竹岡で捕えたイチョウハクジラ

8月3日、台風10号の余波が続く富津市竹岡漁港にクジラが迷込み、海岸に打上げられました。傷だらけで弱っていましたが、竹岡の漁師と子供達の強い願いにより、シーワールドに運び手当をしました。しかし、一時は元気に泳ぐまでに回復しましたが、残念ながらプールに入れて6時間ほどで死亡してしまいました。さすがに大きなクジラだけあって、長径25mのプールもふたあおりで泳ぎきり、あらためてその大きさや力強さにおどろきました。このクジラは、房総沖に分布しているオオギハクジラの仲間で、歯の形がイチョウの葉の形に似ているところからイチョウハクジラと呼ばれている種類で、体長5m28cm、体重1,700kgのメスでした。この種類のクジラは、外国でも飼われたことがなく、大変貴重な保護例となりました。

（佐伯）

●迷子ペンギンの保護

9月20日、白浜フラワーパークから電話が入りペンギンを前の浜で生捕ったとの知らせを受け、現場に急行してみると、眼を丸くしてあたりを見回しているフンボルトペンギンがいました。もう成鳥で、性別は不明でしたが、人の後を着いて来るし、どうやらどこかの施設で飼われていたものと思われました。白浜フラワーパークには、飼うところが無いため、当館で預って飼育する事になり、早速つれて帰りました。他のフンボルトペンギンの飼われているプールに入れてやると、すぐにアジやシシャモの小魚を食べ始めました。飼い主を探したところ、9月12日に台風18号のいたずらで、伊豆の海洋公園から逃げ出したものと判り、10月8日に先方の係員が引取りに来て、無事に戻って行きました。それにしても伊豆から房総まで、1週間のペンギン君の大冒険の謎が残った出来事でした。

（平塚）

●オープン12年目のスター交代2題

10月1日は、シーワールドの開館記念日です。昭和45年に開館して、今年で12年目をむかえました。この日は、シーワールドの動物ショーにとって、2つの話題が生まれました。トドショーとイルカショーのスターが交代し、若返ったのです。トドショーは、開館以来「ゴンタ」「ジロー」によるショーを続けて来ましたが、昭和55年に北海道から来た「ノサ」「エリー」の若いトドのショーに変わりました。また、イルカショーも、11年のキャリアのあるバンドウイルカの「スリム」「フリップ」「スージー」に変って、今年1月に和歌山県太地からやってきた若い「ピーター」「アルファー」が、ショー出場するようになりました。いずれのショーもまだ若い動物達のため、いまひとつ迫力に欠けますが、未来の大スター目指してがんばっています。

（高橋幸）